

聴衆をわかせたフロレス

アレクサンダー・ペレイラ前総裁時代には毎日のようにスター歌手が歌いに来ていたチューリヒ歌劇場も、「市民のための」、「経費削減」、「若手起用」をうたう現アン・デレ・ホモキ総裁になってからは以前常連だったスターたちも「ぶさた」になった。そんななか、2022年の正月は新音楽監督のジャンナンドレア・ノセダがファン・デイエゴ・フロレスを招き、1月1、2日と連夜、豪華なニューイヤークンサートが開催された。

J・シュトラウス「こもり」序曲」はノセダらしくオーバードクションで、真面目に振るせいか、細部までコントラストが美しいけれど揺れがなく、チャイコフスキー「くるみ割り人形」組曲」だったが、前曲以上の生真面目さで突き進む。でも超速でダイナミックだったり、挑戦的だったり、(花のワルツ)では多面的でかぐわしかつたりと、めくるめく変化するテンポを上手に操り、興奮させた。ブラームス「ハンガリー舞曲第17番」と「同第21番」の間にドヴォルジャーク「スラヴ舞曲第3番」を挟み、一貫して重量級の踊りで前半を終えた。

後半のフロレスは2日目だったのにもかかわらず、うれしそうに登場した。レハールのオペレッタ《微笑みの国》から《君はわが心のすべて》、《バガニーニ》から《女たち》から《友よ、人生は生きる価値がある》の3曲を歌うが、彼の声が生きた。本人も承知しているように声が伸びてくる。全曲を歌うにはまた重くであろうビゼー《カル

メン》の《花の歌》ですら、フランス語の鼻音と狭いフォークスの母音に助けられて、心に響くドン・ホセの想いを熱唱した。次の《ウェルテル》(マスネ)は当歌劇場でもプレミエを歌っており、安心して聴ける。そして最後はブッチーニ「マノン・レスコー」間奏曲」でのノセダは奇をてらいすぎて、ブッチーニのロマンティックな揺れも、柔らかなかった。それでもフロレスは《ボエーム》の《冷たい手》を甘く歌ってプログラムを終えた。

アンコールはお決まりのギター弾き語りのカンツォーネや南アメリカ民謡で楽しませたあと、最後はブッチーニに戻り、《トゥーランドット》の《誰も寝てはならぬ》でザルツブルク音楽祭やルツェルン音楽祭と同じように聴衆をわかせた。

ガランチャ&アルバレス

1月19日からは《カヴァレリア・アルスティカーナ》(マスカーニ)&《道化師》(レオンカヴァッロ)再演にエリーナ・ガランチャとマルセロ・アルバレスが登場した。これは2009年のグリシヤ・アサガロフ演出版だが、当時よりすべて改良されていた(1月26日初見)。

まずガランチャは歌い出す前からオーラがありすぎて、みなに無下にされるサントウツツアには向きそうにないと思われたが、「名誉を奪われた」という歌詞にも表現されているサントウツツアの誇りを全面に出し、ただの「すがって泣くだけの女」ではない演技が

真実味を帯びていた。声も、ヴェリズモには向かないと思っていたが、冷静なテクニクで高音や弱音を不安なく歌い、かつ、喉が太く開いたまま噴き出すような豊かな声も説得力がある。アリアの終わりの低音で声がかすれたが、上手く泣きを入れてカバーした。トゥリッドゥを引き留めようと、抱きしめ顔にキスするサントウツツアは迫真の演技で、こんな熱いガランチャはいままで見たことがない。そしてこんなリアルなサントウツツアも聴いたことがなかった。

アルバレスはしばらく聴く機会がなかった。



意外な一面を見せたガランチャのチューリヒ歌劇場《カヴァレリア・アルスティカーナ》から ©Tonisuter

たので心配したが、声はどの音も最適な点に当たり、音楽的処理も上手い。ただそれらを結ぶレガートができなくなっているようだ。歌っている本人は苦勞が多いだろうが、観客はまだ十分満足させられる。そして、サントウツツアへも想いも残っているからこそ、より冷たくあしらうという葛藤がよく表れていて、主役二人の激しい想いのぶつかり合いが、プレミエでは描ききれいになかったすばらしいドラマに生まれ変わった。ローラ役のズヴェトリナ・ストヤノヴァも好演し、プログラムにはジョルジュ・ペティアンと記されていたアルフィオを歌ったルチオ・ガッロも、イタリアン・マフィアの味を出していた。思えば、こんなに「熱い歌声」だけで感動させられるのは何年ぶりだろう。あまりの満足感に休憩で帰りたいくなるほどだった。

次の《道化師》でもトニオ役をこなしたガッロは、以前より野心的でなくなり、聴きやすくなったが、プロローグには少々役不足。ネッタのエカテリーナ・バカヴォーヴァはそつなく歌うが軽すぎる声で、《鳥の歌》など、ヴェテラン指揮者に育つて帰って来たパオロ・カリニャーニの苦肉の策なのか、軽いワルツのように処理されていた。新型コロナウイルスで子供のエキストラを排除したぶん、大人もポップな衣装で、アクロバットも加えるなど、ていねいに改訂された演技がつけ直されていた。アルバレスは軽く歌う部分も上手にこなし、十分に主役を張った。やはりオペラはスター歌手が歌うと興奮度が急上昇するものだと思認識した。